



皿山の群像【I】

～幕末の有田を支えた人々～

〔フルベッキと石丸虎五郎〕



フルベッキ（中央洋装の人）とその生徒たち（長崎県立長崎図書館蔵）

安政5年（1858）、アメリカを皮切りにオランダ・ロシア・イギリス・フランスの5カ国と修好通商条約を結んだ幕府は、神奈川・長崎・兵庫・新潟・函館の港を開港しました。その翌年11月7日長崎にやっていたのがアメリカのダッチ=フォーム下派の宣教師、フルベッキです。彼は幕府直轄の済美館と佐賀藩が長崎に設立した致遠館の2つの学校で教鞭をとりましたが、そこで学んだ生徒には佐賀藩士の大隈重信、副島種臣、石丸安世（虎五郎）らがいました。

石丸安世はのちに禁制を犯して馬渡八郎とともに英国に密航。当時開催中のパリ万国博覧会で佐賀藩から来ていた佐野常民らと合流し、帰国後は明治政府の電信頭、造幣頭などを歴任した人物です。彼が長崎滞在中での寓居が当時大村町にあったという久富商店で、ここを訪れた有田の若者と親しくなりました。英語を習熟した石丸は長崎在住の外国人とも交流があり、彼の斡旋でフルベッキを始め、ドイツ人化学者ワグネルや英国人の貿易商アベン、鋳山技師モーリスも有田を訪れています。「鍋島直正公伝」によれば、慶応元年

に石丸の案内で肥前の国を旅したフルベッキはその感想の中で、嬉野の温泉とともに「松浦郡の峯巒の石質に大古層を現し、其下に白泥を蔵し、形貌の奇峻なる普通の山水と異なる」を喜んだとあります。

石丸はこれらの新知識を持つ人々を深海平左衛門（泉山の窯焼き）・百田恒右衛門（泉山の商人）・深川栄左衛門（本幸平の窯焼き）らに紹介し、その頃の最大関心事であった鎖国論や攘夷論などは「井の中の蛙の愚見の極であってこれからは世界の大勢を明察し、大いに貿易を伸暢すべき」と警告しました。

石丸は幕末期に早くも先進国の状況を知り、その知識をあますことなく有田の人に教え、それを貪欲なまでに吸収した有田人士がその後ウィーンやフィラデルフィアなどの万博を舞台に活躍したことは歴史が如実に語っています。明治35年に69歳でなくなった石丸は、現在東京の青山霊園に眠っています。彼は「佐賀の七賢人」にこそ名を連ねてはいませんが、この有田にとっては近代化の恩人であり、皿山史に残る人物の一人だと思います。



フルベッキについては大橋昭夫・平野日出男共著「明治維新とあるお雇い外国人～フルベッキの一生」、高谷道雄編「フルベッキ書簡集」、重久篤太郎著「お雇い外国人⑥教育・宗教」などがあります。石丸虎五郎については有田町史「陶業編I」のほか久米邦武編著「鍋島直正公伝」、中島浩氣著「肥前陶磁史考」にもあります。

季刊

皿山夏

No.42

有田町歴史民俗資料館・館報

『有田皿山にて』 余話

野田宇太郎と鐘ヶ江録

日本近代史家である田中彰さんが近著「小国主義」（日本の近代を読みなおす）のなかで、あらましこんな意味のことを書いています。

「歴史では『もし』がタブーとされているが、そうとばかりはいえないのではない。歴史は展開するときに幾つかの選択肢の中から一つを選ぶ。だから、もし別の選択肢であったならと考えることは、解釈を豊かにし、問題点をはっきりさせることにもなる」

確かにそうで、『有田皿山にて』の詩人蒲原有明についてもそれがいえます。彼は日本近代詩に象徴詩の金字塔を打ち立てた人ですが、もし彼が野田宇太郎という良き後輩にめぐりあわなかったら、その類まれな詩業にもかかわらず、全く顕彰されることなく、寂しく生涯を閉じたのではないかと考えられます。

〈借家人は川端康成だった〉

有明と野田の出会いは全くの偶然でした。

有明が東京から鎌倉宮に近い鎌倉市二階堂に移り住んだのは大正9年春。その家が大正12年の関東大震災で傷むと応急処置だけをすませ、あとの差配は近所の植木屋に頼んで静岡市鷹匠町に転居しました。静岡は気候が穏やかで暮らしよく、読書や著作にも好適だろうとみたからでした。ところがその住まいは昭和20年6月の米軍の爆撃で丸焼けになりました。親友であった天才画家青木繁の油絵一点とわずか原稿用紙の束が残っただけです。万卷の蔵書も灰になりました。

裸同然になった有明夫妻は20年9月、養女の静子さん（いま77歳で健在）と3人で鎌倉に戻ります。貸している家の一部屋だけでも空けてほしいと頼むためです。借り手が作家の川端康成だったことが幸いし、すぐに元の茶室の6畳をあけてもらいました。植木屋任せにしていた有明は川端が借り手とはつゆ知らず、川端も蒲原が家主とは知らずにいたのです。ただ茶室とはいっても物置同然に荒れていて、有明は静子さんに青木の絵を壁にかけさせました。「海」という作品です。有明70歳。もう耳が不自由になっていました。

〈文化勲章のほうに泣いている〉

そのころ、野田は文芸誌『芸林間歩』を創刊する準備に奔走中で、川端を訪ねて、有明と初めて対面しました。「日本近代詩に貢献した最も偉大な詩人の有明がすでに老齢の戦争被害者であるのを何とか元気づけて、象徴詩に限らず体験された近代日本文学史や、とくに親しかったわたくしと同郷出身の画家青木繁のことなどの思い出を聞くのを楽しみにした」。

『芸林間歩』の創刊が昭和21年4月と決まると、有明に自伝の執筆を頼みました。他人との会話を筆談で

していた有明は『黙子覚書』という題にしました。出版のときに『夢は呼び交す』と改めました。

これを読んだ文学者たちは有明がまだ存命だと知って驚きました。23年、会員互選の芸術院会員に迎えました。さらに有明の死後、『定本蒲原有明全詩集』の編集委員たちはフランス文学者辰野隆を代表にして文化勲章を追彰するよう文部省にかけあいました。

「文部省では有明など全く知らず、ただ前例がありませんのでと断った。私は有明よりも文化勲章の方が泣いているのではないかと思った」と野田。

その後、野田のアイデアで生まれたのが有田陶磁美術館にある『有田皿山にて』の呉須の陶板です。



蒲原有明詩碑除幕式（昭和34年10月11日）
左より野田宇太郎さんと遺族の静子さん、喜美子さん、一正さん、町議員の瀬戸口勝次さん

〈朝日に輝くペン先〉

ところで『夢は呼び交す』に、有明に大きな感化を与えた『西岡』という若い女性が登場します。

「おれの生涯は敏慧で寛容な夫人の優雅な言葉を縫糸にしてはじめて仕立てられた一領の衣である」

有明が全身の吹き出物に苦しんだことがあります。11歳のときです。それを知った『父とは同国の出身

の西岡という医家の若い未亡人」が、自分が京橋でやらせている塩湯はどうだろうと勧めました。寝泊まりをして毎日一番風呂に入って治療をすることになりました。夫人も一緒に入って体をたでてくれました。8歳のとき生母が離縁になって継母に育てられた有明は、すでに詩に親しむ少年になっていましたが、夫人の親身な介護が終生忘れられないものになりました。

夫人はカトリックの信者でした。塩湯の奥座敷を自室にし、文机には華やかな卓布がかけられていました。毛筆に混じってペン軸が立っている筆立があつて、朝日がさしこむとペン先が金色に輝き、脇にあるインキ壺の切子の角が閃光を放ちました。机上に数冊の洋書が無造作に置いてありました。その情景が少年に「迫ってくる時代の新鮮味」を感じさせました。



蒲原有明愛用の補聴器

《文明開化のフランス語学校》

有明は明治38年に父忠蔵をなくし、翌春には有田町に隣接する旧曲川村蔵宿の造り酒屋、西山健吾の3女君子を妻に迎えましたが、どちらの場合も、『西岡夫人』の格別の世話になったとあります。なのにその恩人の身元となると、父とは同国の医師である夫と早く死別し、今はミッションスクールの校長に推されているとしかありません。そこで『夢は呼び交す』の注釈に『本名は鐘ヶ江ろく。ミッションスクールは現双葉高校』とあるのを手掛かりに周辺を調べ、僅かに輪郭らしいものをつかみました。

双葉高校とは東京都千代田区6番町・学校法人双葉学園のことでした。同学園に頂いた資料から、ミッションスクールとはカトリック系のサン・モール修道会が明治20年1月麴町区下6番町に開いた仏語（ふつご）女学校のことと分かりました。東京府庁に出された開設願の名義人に『校長鐘ヶ江録』とあり、費用のいっさいを録が負担したようです。また同年の『女学雑誌』に「佐賀県士族鐘ヶ江ろく子（30歳）という金持ちの寡婦が開校した」とあります。教科はフラン

ス語だけ。2年制で定員50名。有明が塩湯で治療したのは明治19年末ですから、録が開校準備のために一番忙しかった時期に当たります。

録は明治18、19年ごろサン・モール修道会が経営する『若い女性のための寄宿学校』でフランス語を学んでいます。学友に伯爵後藤象二郎の3女後藤木末（こずえ）がいて、19年に一緒に洗礼を受けています。録の代父はレスラーという、明治憲法の制定にかかわったドイツ人の法律家だったそうです。

* * *

この春、鎌倉に静子さんを訪ねました。今も昔も詩では食えないようで、「生活を支えたのは小原流華道の師匠だった母でした」とのことでした。そういえば詩人の萩原朔太郎が有明を訪ねて、近所の人に、生け花師匠の家ならと教えられ、「フランスなどでは考えられない」と憤慨したという話があります。

有明は明治41年に珠玉の詩集『有明集』を出しますが、自然主義派の詩人たちの攻撃の的になったことから嫌気がさし、それ以後は詩壇には顔を背けて暮らします。その世捨て人に温かい日差しを当てたのが野田です。野田は文芸風土の研究に新生面を開いた『文学散歩』の創造者として知られていますが、有明のことも手柄の一つです。彼の故郷、福岡・小郡市立図書館に併設の野田宇太郎文学資料館に2人が一緒に写った写真があります。それを見ていますと、野田の優しさが伝わる思いがします。（森田一雄）



前方蒲原有明さん 後方野田宇太郎さん
昭和26年11月15日の撮影

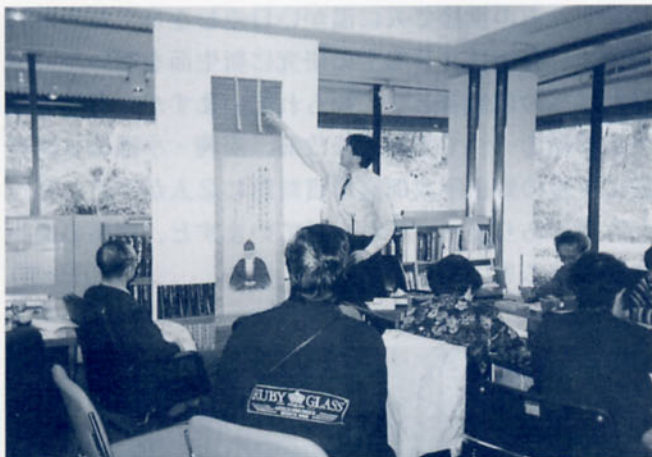
（野田宇太郎文学資料館蔵）

講座「掛け軸を楽しもう」 開催しました

3月14日(日)、雨が降りしきる中、10年度の講座として各家庭にある掛け軸の取り扱いについての講習会を開催しました。参加者14人は講師の福井尚寿先生(当時佐賀県文化財課・現佐賀県立博物館)に正しい掛け軸の取り扱いについての講義を受けました。

どこの家にも一本はある掛け軸ですが、意外とその取り扱いについては知らない方が多いのではないのでしょうか。巻き方や矢筈(高い位置に掛けるための道具)を使つてのちょっとしたコツや、一本の掛け軸を床の間などに掛けておく期間など参加者の皆さんは一つ一つ納得しながらの2時間でした。

最後には鑑定団とまではいきませんでしたでしたが、真贋の見分け方についても触れていただき、大いに盛り上がりました。今後も機会がありましたら各家庭にある「家宝」の正しい取り扱いについての講座を開催したいと思いますので、ご参加ください。



続・濃み筆の つぶやき

今年の陶器市は好天に恵まれ、関係者の努力の甲斐あって1週間に88万の人が有田を訪れました。この時期いつも思うことは、大正4年にこの陶器市を発案・実施した深川六助氏とその仲間たちのことです。

成功をいぶかる長老たちを説得し、協賛行事の実施や荷物の無料運搬など、市を成功させるためにあらゆる努力を惜しまなかった先達のことを現在の私たちは忘れてはならないと思います。(葉)

参加者募集中!

～皿山の模型をつくりましょう～

有田町歴史民俗資料館の活動として、今年度は皿山の町並みを再現した模型づくりを計画しています。安政6年(1859)に作成された有田皿山の絵図は内山地区の道路や川筋など、現在と比較してもそう大きな違いはなく、今でもこの絵図を手にとって町内を歩けるほどです。

そこで実際に町を歩き、さらに「有田千軒」といわれた町並みを模型で再現してみようと思います。子供たちにも町家を一軒ずつ作ってもらい、おとなの方には背景の山や川、道路、登窯などを担当していただき、世代を越えての作業を行いたいと思います。

参加ご希望の方、また作業の詳細については資料館(☎43-2678)までご連絡ください。



人事 従来

平成9年から当館館長を勤められました森田一雄前館長が3月31日付けで退職されました。在任中は「女の有田皿山 さんぽ史」の刊行や、「なつかしの有田～1,000点の写真が語る有田の近・現代史」の開催など有田皿山史に新たな視点をあてた活動を指揮していただきました。この2年間で、町内外の方々に資料館の存在を再認識していただいたのではと思います。

これらの一連の資料館活動は、「町民と共にある資料館」でなくてはならないという、館長の強い理念のもとに実施してきたものです。今後もこの思いを受け継いで日々の活動を行っていきたいと思います。

また、前館長の後任として新しく館長に久富桃太郎が着任しました。

* * *

このたび、森田前館長のあとを引き継ぐことになりました。先人の功德を偲び、皆様に開かれた歴史民俗資料館でありたいと思っています。よろしく願います。(久富桃太郎)

季刊『皿山』

通巻42号(平成11年6月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185